

不登校現象の基本問題

篠原 道夫

I 今日の不登校現象

(1) 逆様の立場から

筆者は、教育学部の心理教育相談室の運営を主な仕事としている。この相談室では、主に子どもの心理療法とその親の相談にのっている。ここでの相談の8割5分くらいを不登校の問題が占めている。子どもの心のケアを考える時、《不登校》が今日の問題としての重要性をもっていることを実感している。

子どもの心理的ケアの重要性が、かなり認められるようになってきた。子どもの生活の中心は、学校である。その学校生活で子どもの理解者となる教師にも、カウンセリングや子どもの心理的世界の理解が求められるようになってきた。教師は、いわば教室のスターである。子どもたちの注目を一身に浴びている。表舞台で演じる人である。それに対して、心理療法家は裏方である。何か起きなければ、通常遭遇しない職業人である。教師と心理療法家は、同じ子ど

もという現実には逆方向からかかわっている。いわば、同じコインの裏と表をそれぞれ見ている関係にある。したがって、本論文における不登校現象の検討は、子どもという現実を逆様の立場から吟味する試みである。

(2) 不登校の拡大

不登校問題の今日的重要性は、不登校の著しい増加にある。そこで、まず統計的側面から、不登校と言う出来事を展望してみたい。不登校の相談の実態は、実に様々である。例えば、「もう2年ほど学校に行っていないくて、ずっと家にいます」という方が相談にみえることもある。また、「娘が不登校になってしまった」と訴えられるので、詳しく聴いていくと、まだ2日しか休んでいない場合もある。下表は、2002年8月9日に文部科学省が発表した「学校基本調査速報」を、基礎資料にしている。この調査では、各年度中に《不登校》を主たる理由として30日以上欠席したことを調査の基準にしている（全

表 不登校を主な理由として30日以上欠席した児童生徒

年度	小学校 (単位：千人)	出現率 (単位：%)	中学校 (単位：千人)	出現率 (単位：%)	合計 (単位：千人)
94	16	0.18	62	1.32	77
95	17	0.20	65	1.42	82
96	19	0.24	75	1.65	94
97	21	0.26	85	1.89	105
98	26	0.34	102	2.32	128
99	26	0.35	104	2.32	130
00	26	0.36	108	2.63	134
01	26	0.36	113	2.81	139

児童生徒数に対して不登校が占める割合を、出現率として表記した)。小学校では2万6千人、中学校では11万3千人、合計13万9千人が30日以上休んだことになる(ちなみに、神奈川県は、約9千人くらいである)。

94年度から2001年度までの8年間に倍近くに増加している。2000年度に不登校は、中学校で2.6%を占めるようになった。この出現率は、38人に一人の割合で発生するという計算になる。99年度が、43人に一人の出現率であった。したがって、いよいよ40人を切ったという点で、2000年度の出現率は重要な意味を持つ数字である。あくまで数字の上でのこととはいえ、一クラスに一人ずつ不登校の生徒が含まれるわけである。今日の不登校は、中学校の現場においてかならず遭遇する出来事なのである。

(3) 高校の不登校

「不登校が13万人を超えた」と報道され、不登校の問題はますます重要な課題となっている。しかし、これは小中学校の出来事である。文部科学省の調査も高校生は対象から外れている。小中学校では学年があがるにつれて、不登校の発生率は右肩上がり増加している。したがって、高校において急に不登校を引き起こす要因がなくなるわけではないだろう。高校生の心の危機は、やはりあるだろう。しかし、それは《不登校》という形で実を結びにくいという事情がある。

中学校では相対的に、のんびり学校を休むことができる。例えば、中学1年の時に不登校になり、学校にまるで登校しなくても、中学2年、中学3年と進級して、そのまま卒業することができる。一方、高校では、すぐに留年か、自主退学かという選択を迫られて、学校を休む上限が切られてしまう。不登校の生徒は、あくまで学校に在籍しているからこそ、《不登校》なのである。学校を辞めてしまえば、ただの人になってしまう。したがって、高校時代においては、不登校という教育問題は、医療の問題へ場所を

替えていくことになる。このような現状のため、高校の教員の不登校についての情報量は、個人差が大きいようである。個人的に関心をもって勉強している教員と、まったく不登校について基本的知識をもっていない教員に二極化している。近年では、不登校の問題も、自主退学生徒の増加問題の一分野を構成するものとして共有されつつある。

II 不登校とは何だろうか

(1) 学校恐怖から不登校へ

現在、《不登校》と呼ばれている事態は、次の①～③のように名前を変えて現在にいたっている。

①学校恐怖症 (school phobia) : 最初は、恐怖症の1つの形態と不登校は考えられていた。恐怖症には、高所恐怖、閉所恐怖、先端恐怖、視線恐怖、動物恐怖など、いろいろある。それぞれ特定の恐怖対象をもっている。先端恐怖だったら鉛筆の先、馬恐怖だったら馬が恐くなる。同じように、不登校も、学校が恐怖対象として特定された恐怖症と考えられた。例えば、「普段は普通にしているのだけれど、学校の近くまでいくと強く緊張し、校門前まで行くと顔面蒼白になって脂汗がでてくる。そして校門から1歩も踏み出せない」。このようなケースは、不登校の古典的なケースである。今でも、存在している。しかし、「どうしたわけか学校にいけない。しかし、行けるときは普通に行って普通に過ごす」というようなケースも、そうとう存在していることが段々明らかになっていった。このような臨床像は、恐怖症という枠に収めきれなくなったのである。

②登校拒否 (school refusal) : そこで、次には、《登校拒否》と呼ばれるようになった。ところが、登校拒否の子ども本人は、実は、学校に行きたいと思っているのである。むしろ、「行こうと思っているのに、行くことができない」というところに、本人自身の苦しみがあることが段々

に理解されるようになった。彼らは、国語的な意味で《拒否》しているわけではないのである。登校拒否の《拒否》は、臨床像の本質とズレていたのである。

《学校嫌い》という教育用語も同じズレを抱えていた。先の文部省の調査では、97年度まで、《学校嫌い》というネーミングを使用していた。この調査において、《学校嫌い》は、「心理的な理由などから登校を嫌って長期欠席した者」と定義されていた。不登校は、学校が嫌いで登校しないわけではない。したがって、97年度までの調査における《学校嫌い》という名称は、実態にそぐわないものであった。

③不登校 (non-attendance at school)：そして、現在は、《不登校》と呼ばれるようになった。この不登校現象は、次の3点にまとめることができるだろう：(1) 怠けているとか、学校が嫌いなのではない、(2) 自分では登校したいと思っているのだが、どうしても行けない、(3) 無理に登校しても、頭痛や嘔吐などの身体症状がでて、学校におれなくなるような状態である。本論文においては、この3点を手がかりにして議論を展開していきたいと思う。

先の調査では、98年度から《不登校》という言葉を使用し始めている。ここでは、《不登校》は、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にある者」と定義されている。いわば、これが文部行政上の不登校の定義である。この調査の量的推移を辿ると、97年度と98年度の間に2万の激増がある。そして、99年度は、増加ペースが落ち着いている。98年度の激増の理由は、文部省の調査上の定義の変更にある。この変更の結果、それまで「その他」に分類された長期欠席者が、《不登校》に含み込まれたために激増したのである。

(2) 状態記述と原因記述

不登校という教育用語は、実は状態を記述したラベルに過ぎない。「学校に行っていない」と

いうことを、漢字三文字で表したに過ぎない。診断ラベルには、このような状態記述的な場合と、原因記述的な場合がある。不登校というラベルは、なんら原因について語っていない。したがって、「不登校に罹ったから、学校に行けなくなった」という議論は同語反復であり、何も語っていないのである。

不登校とは、原因を不問にした教育用語である。あえて不登校の原因を挙げるとするならば、「それは、様々だ」としか言いようがない。不登校という現象は、発熱に似ている。風邪をひいた時も熱が出るし、癌のような大きな病気に苦しんでいる時にもでる。それから、激辛カレーを食べても体温は上昇すると思う。正常範囲のものから、重症の病的事態まで様々な状況で熱が出るということが起きる。不登校現象も、同じである。例えば、目の前の不登校が、精神病の前駆段階の表れである場合もある。妄想や幻覚に苛まれていれば、学校にいくどころではなくなるはずである。あるいは、拒食症にかかって、栄養失調でフラフラだったら、やっぱり学校に出てこれられない。同じ不登校といっても、その内実は実に多様なのである。

(3) 引き金

不登校の《原因》は、一人一人違う。そこで、直接、本人にどうして学校に行かないのか理由を訊いてみると、本人なりに、学校に行かない理由をいう場合もある。例えば、「虐められたから」、「先生が嫌いだから」、「勉強が分からないから」などの理由を述べることもある。この時、本人の述べる訴えは尊重される必要がある。本人と一緒に右往左往することで、親や担任教師が真剣に取り組んでいることが本人に伝わるだろう。しかし、この《理由》に振り舞わされないことも大切である。例えば、「担任が合わないから学校に行かない」と本人が述べたので、無理して担任を降ろして交替したとする。しかし、交替しても変化のないことが多い。短絡的に《理由》を額面どおりに受け取ると、足

元をすくわれて腹を立てる羽目になる。周囲が腹をたてて、本人が針のむしろに置かれた状態に陥り、おちおち家で休めないという場合は、問題がこじれていくだろう。

本人の述べる《理由》は、いわゆる《原因》と区別されるべきだろう。中井・山口(2001, p19)は、次のようなラクダのたとえ話を紹介している。ラクダの背中にワラを一本ずつ載せていったとする。いずれラクダは、ワラの重みで倒れるだろう。ラクダが倒れたのは、最後の一本のワラが《原因》ではない。しかし、ごく軽いワラ一本が大きな問題を引き起こす《引き金》となることはあるのだ。不登校は、非常に心の深いところで起きている出来事の現われである。そのため、本人もよく分からないまま学校にいけなくなることが多い。だからこそ、子どもの深層心理や心理療法について学ぶ必要性もでてくるのである。

III 思春期の心理的世界

文部科学省の調査において、ここ数年、小学校の不登校は2万6千人台を推移している。2000年度から2001年度にかけてはほとんど増加していない。増加の頭打ちの印象を受ける。それに引きかえ、中学校の不登校は着実に増加しており、思春期における不登校問題の重要性が窺える。そこで、思春期における不登校を特に取り上げて議論したいと思う。

(1) 無気力型不登校

中学生の時期に入ると、《無気力型の不登校》というタイプの不登校が出現し始める(例えば、篠原, 2001)。このタイプの不登校は、次のような状態を呈す: 「なんとなく学校に行く気になれない。学校に行きたいわけでも、行きたくないわけでもない。本人自身は困っていない。しいて困っていることと言えば、退屈であること。親や担任にあれこれ言われるのはうるさい。でも、特に親や担任が嫌いなわけでもない。」こ

のような《無気力型不登校》は、不登校の中核群ではなく、亜型の不登校のように見える。なぜならば、不登校現象の特徴は、「自分では登校したいと思っているのだが、どうしてもいけない」というところにあるからである。このタイプの不登校を単純に考えたならば、「怠けて学校に行っていないだけ」ように見えがちである。しかし、筆者は、このタイプには《思春期の発達課題》が深くかかわっており、特別に重要な不登校のタイプであると思う。そこで、思春期の発達課題について議論をしたい。

(2) 思春期内閉

思春期の訪れの大切な指標は、《こもる感じ》の出現である。親や教師などの視点から見た場合、具体的には、次のような特徴として現れてくる、と河合(2000, pp51-52)は指摘している: ①無愛想になる、②無口になる、③体の動きが重くなった感じがする。そして、親の主観的な感覚としては、④お互いの間の気持ちの交流がないような感じがする。子どもがどこか他の世界に行ってしまったような感じを体験する親もいる(河合, 2000, pp51-52)。このような思春期の子どものこもる心性は、《思春期内閉》と呼ばれている(例えば、山中, 1978, p204; 山中, 1996, p177)。

思春期において、自分らしさを明確な形で把握することは、特に大切な発達課題である。「自分自身とは何者か?」という問いは、我々の毎日の生活の土台を問うている。これは、大変重要な問いである。この土台が確かめられなければ、本来、「毎日の生活をどう営むのか?」という枠組もゆらいでしまうはずである。思春期とは、この問いにすなおに立ち止まる時期である。この課題に取り組むためには、たいへんな心理的エネルギーを消耗する。そのため、内にこもることによって、内側の仕事にエネルギーを集中する必要がでてくる。思春期の子どもは、内にこもることを必要としている。そのため、思春期には何らかの形で内閉状態が起きてくる。

学校場面では、思春期の子どもたちは、授業であまり発言しなくなる。この現象も、こもる心性の表れである。小学生までは、教師が発問すると、競って「ハイ」と手を挙げる。それが、中学になると、シラーとした重い空気になる。微妙な形ではあるが、少し成績が落ちることもある。この現象は、エネルギーが内的仕事に吸収されて、外的仕事の使える分が相対的に減ってしまうため生じる。これくらいは、まったくそれと気づかれずに経過していくものである。ところが、文字どおりの閉じこもり状態に陥ってしまった状態が、不登校なのである。

思春期の内側の仕事は、深い無意識の体験である。その深さは、言葉で明確にはとらえられない深さである。そのため、無気力型の不登校のように、「なんとなく学校に行く気になれない」としか言えなくなる。無気力型の不登校こそ、実は、「思春期型不登校の純粹形」といえるかもしれない。普通は、本人も大人もなんらかの日常的な理由を見出そうと努力しがちなものである。例えば、①イジメられたから、②先生が嫌いだから、③勉強が分からないから、というような理由である。何か分からないという事態ほど人間を不安にさせるものはない。だから、何らかの見かけの形を取り易いのである。

(3) サナギの時期

思春期は、《サナギ》に喩えられることがある。サナギとは、イモムシからチョウへと移行する中間段階である。思春期の子どもも、子どもから大人へと移行する中間段階にいる。そのため、河合(1992, p143; 2000, p52)は、思春期を《サナギの時期》と呼んでいる。サナギの内側では、イモムシからチョウへの変身という重要な作業がなされている。しかし、サナギの外側からはその活発な作業が見えない。思春期内閉状態も、大人から見れば活動性が乏しくなったように見えるが、内側では活発な心理的作業が進められている。思春期は、サナギに似た状態なのである。

一般的に、移行段階は不安定な時期である。外側からの圧力に弱くなる。喩えていえば、サナギ状態の思春期は、家の大規模な改造工事をしているようなものである(河合, 1970, pp61-63, を参照)。このような改造中に運悪く台風がくると、家が壊れやすい。サナギの殻は、この不安定な時期を保護する働きがある。思春期の内閉は、この殻としての意味を持っている。

思春期内閉は、日常生活の視点からみると、非生産的で病的事態と評価されがちである。しかし、移行段階を保護する機能という重要な役割もっている。いたずらにサナギをつついて変性状態のイモムシを殻からひっぱり出そうとするのではなく、サナギ状態を尊重する姿勢が必要なのである。思春期の不登校に対しては、まずその状態を尊重して待つことがとても大切になってくる。時が熟する前に学校につれだそうとすることは、サナギをやぶくことと等しい。ところがこの《待つ》ということは実は難しい。そこで、専門家との暖かな信頼関係と見通しによる支えが必要になる。つまり、心理療法が必要となってくる。しかし、最初の相談相手は担任であることがほとんどである。だからこそ教師、教師志望の学生が、不登校とその心理的世界について学ぶ必要性がでてくるのである。

IV 不登校と身体症状

(1) 不登校の身体症状

不登校の子の多くは、身体症状を伴っている。代表的な身体症状は、①頭痛、②腹痛、③吐き気、④めまい、の4つである。これらの身体症状は、特に不登校の前駆段階から発現してくる。言わば、身体症状は、不登校の前兆現象である。また、身体症状は、不登校の初期段階でも出現する。多くの場合、この時期に、親や教師が説得したり、力づくで登校を促そうとする。このような外圧に屈せず、ガッチリとした不登校状態が構築されると、多くの場合は身体症状が消失していく。

身体症状が出現したり、消失したりすることには意味がある。不登校のなり始めの段階で、普通、周囲の大人は、善意から登校するように説得したり、力づくで登校を促そうとする。身体症状は、この善意の外圧から、子どもの内閉を守る役割を果たしている。別の言い方をすれば、身体症状は、イモムシからサナギへの変換過程を保護している。カッチリしたサナギが形成されてしまえば、身体症状の役割になる。役割がなくなれば、自然に身体症状が消失していくのである。

不登校の子どもばかりでなく、学校の中には不登校予備軍の広いすそ野がある。心理的に不安定な子どもたちは、自分の心理的世界をなかなか言葉で表現することができない。そこで、言葉の替りに体で訴えるのである。様々な身体症状は、子どもたちの《心の声》なのである。

心の中の問題が、身体的問題（つまり、身体症状）に置き換わる現象は、《身体化》と呼ばれている。逆に、心の中の出来事を言葉で表すことは、《言語化》と呼ばれている。この言語化ができない時に、身体化が生じてくる。裏返せば、言語化ができれば、身体化する必要性はなくなる。つまり、身体症状が消えるはずである。だから、体調不良を訴える子どもたちの話をじっくり聴いてあげることが大切なのである。身体症状を訴えて保健室を訪れる子どもたちは、そこで様々な話をする。もちろん、直接的にこのころの内面を語りはしないだろう。しかし、一見、雑談のようにみえる話を注意深く聴いていると、彼らの内面が垣間見えてくるはずである。

(2) 保健室登校

様々な理由で、子どもは学校に行けなくなる。そして、その不登校の形態は様々である。例えば、①「教室には入れなくなってしまった。しかし、学校まではこられる」という場合がある。逆に、②「ずっと家に閉じこもっていた子が、学校まで出てこられた。しかし、どうしても教室の中にはまだ入れない」という場合もある。そ

う言った時に、学校生活の中で受け皿となり易いところが、保健室である。そのため、《保健室登校》はよく見られる現象である。

《保健室登校》とは、学校までは来られるけれど、保健室で過ごして帰る形の登校である。保健室登校と言っても、ピンからキリまである。1週間に一度保健室で過ごすことで精一杯の場合もある。また、一般の生徒の登校時間帯を避けて、遅れて登校し、早く帰宅する場合も多い。保健室で過ごすのは一時間が限界という状態もある。このような状態は、不登校の一部と考えてよいと思う。また、不登校と同じように、朝起きられなくなったり、頭痛、腹痛、吐き気が起きたりして、登校を渋る。

日本学校保健学会は、96年に保健室登校の実態調査を実施している（森田、1998を参考）。保健室登校の存在する小学校は、全体の37%を占めている。中学校では55%、高校では44%の学校に保健室登校の子どもが存在している（この調査は悉皆調査ではなく、調査対象は372校である）。このような現状を踏まえて、99年度の中央教育審議会答申で、保健室は、「心の居場所としての保健室」と位置づけられた。

(3) 身体的ケアの効果と危険性

養護教諭は、身体的ケアという切り口から不登校や、その予備軍の子どもたちとの関わりに入っていくことが多い。これは、たいへんな利点である。思春期の心理的世界はなかなか言葉で扱うことが難しい性質をもっている。そのため、箱庭や夢などのイメージを導入する必要も生じてくる。身体的ケアの利点は、言語を介さずに直接的にケアすることができる点にある。

身体的ケアは、影響力が強いという特徴がある。例えば、非常に強い不安や恐怖にとらわれている人に、何か言葉をかけるよりも、体をさすってあげる方がその人を安定させる力は大きいかもしれない。一方、その影響力のコントロールがしにくいという側面もある。そのため、

身体的ケアの訓練をきっちり受けている必要がある。一般の教師や、心理療法家が体に触ったりすると取り返しのつかない失敗を引き起こす危険性をもっている。

言葉は、通常、何らかの意味を伴って伝達される。しかし、意味が伝わらないことも多々ある。その上、相手が不安や恐怖にとらわれていると、曲解されてしまうこともある。身体接触は、言葉以上に相手にどう受け取られるかをコントロールできない面がある。例えば、身体接触をセクシャルな意味で受け取られる場合がある。思春期においては、性は特に大きな意味がある。性や異性を十分に自分のものとして受け入れていない状態の思春期の子どもにとって、たいへんな脅威として体験され易い。不用意に身体接触すると、強い不安を引き起こしたり、後々長く残るような心の傷を負わせることになりかねない。したがって、思春期の子どもとの身体接触は、特に慎重でなければならない。

V 適応指導教室のサナギたち

(1) 学校の外の居場所

最近、スクールカウンセラーを学校に配置する取り組みが国レベルで展開している。2001年度から5年計画で、中学校でのスクールカウンセラー配置が制度化される。2005年度までに3学級以上の全国約1万校に配置される予定である。今後、中学校においては、スクールカウンセラーとカウンセラー室の活用が、大きな課題になっていくものと思われる。保健室・スクールカウンセラー室の活用などに代表される学校内の取り組みに対して、学校の外に居場所を作る取り組みも行われている。その中で、《適応指導教室》が特に重要な役割を果たしていると思う。そこで、適応指導教室でサナギたちがどのように過ごしているのかについて考えてみたい。

《適応指導教室》とは、不登校児を集めた居場所である。彼らが、適応指導教室に集まって

くる道筋をたどってみよう。①学校に行けなくなってしまった子どもは、まずは家にいる。②状態が落ち着いてくると、少し動き出したくなる。家庭での対人交流は、狭いものである。少し窮屈になる。だから、対人交流の幅を広げたい。しかし、まだ学校までは出られない。学校での対人交流は広すぎる。③そこで、学校以外の子ども同士の交流できる場はないだろうか、と探し始める。適応指導教室は、このような状況にいる子どもたちの受け皿なのである。

適応指導教室の子どもたちは、勉強したり、遊んだりしている。トランプしたり、卓球したりする。時々、料理教室をしたり、サイクリングに行ったり、バドミントンや野球（ゴムボールレベルだが）をしたりする。内容は、さして特別のことがあるわけではない。勉強すること、遊ぶことは、それ自体が目的ではない。これらはすべて、心と心を交流するための素材である。心と心の交流がそこにあり、その土台の上に乗ってこそ、勉強することも、遊ぶことも意味を持つのだ。いわば、それらはオカズである。大切なことは、ご飯をどうおいしく食べられるか、という点にある。オカズに懲りすぎて、ご飯を食べるのを忘れてしまったら、本末転倒である。

不登校の子どもにかかわる親や教師は、「学校に行けないのなら、少しでも学習が遅れないように適応指導教室に入れよう」、あるいは、「少しでも学校に類似した場所に通わせよう」と思いがちである。しかし、遅れた学習を補うために適応指導教室に入れようとすることは、本末転倒なのである。親の中には、「学校を休むと、学習が分からなくなる。学習が分からないので学校に行きにくくなった。」というある種の《二次災害》を心配する人もいる。実際、この形の悪循環に陥ったように見えるケースもある。しかし、筆者は、多くの子どもは、登校できるようになる時は、勉強が分かるようになってまいが登校する、という印象を持っている。勉強の遅れを取り戻さないと登校できない、ということ

はない。勉強の遅れがないことは、登校できることの必要条件ではない。また、学力があることと、登校できることは無関係であるようだ。例えば、学校には日頃まったく通っていないにもかかわらず、定期テストだけは常に参加して、常に学年トップクラスを維持していた不登校の子どももいる。

(2) 対人交流の展開

適応指導教室に入った子どもは、まず世話してくれるスタッフとの交流から、グループの対人関係の中に入って行く。しかし、しばしばスタッフとも交流ができないこともある。教室に来て、1～2時間マンガを一人で読んで帰る子どももいる。来室しても、もっぱらテレビゲームをしていて誰ともしゃべらない子どももいる。逆に、黙々と一人で勉強をするという形で、他者と交流しない子どももいる。このような子どもにとっては、他者と交流する以前に、他者と空間を共有することが第一の課題なのである。マンガ、テレビゲーム、勉強はカサブタのようなものである。その子の傷つき易い心を保護している。だから、それを不用意に引っぺがしてはいけない。まずは、その子の居方を尊重してあげる必要がある。

適応指導教室での対人交流は、スタッフとの交流から始まり、しだいに子ども同士の交流へと発展していくことが多い。スタッフとの交流は、大人との交流である。子どもにとって、大人は自分を受け入れてくれる存在である。それに対して、子どもどうしの交流は、対等な交流である。スタッフとの交流を《タテの関係》と考えるならば、子ども同士の関係は《ヨコの関係》となる。適応指導教室では、ボランティアの学生を受け入れているところがある。この大学生との関係は、《ナナメの関係》になる。学生スタッフの存在意義は、タテからヨコへと展開していく対人関係を媒介する働きにある。

いったん子ども同士のグループが形成されると、このグループは生き物のようなところがあ

る。一度、走り出すと、なかなかコントロールしにくい。グループの中では、楽しいことばかりが起きるわけではない。悲しいことや、つらいことも起きる。様々な体験を消化することで、その子の身になっていくのである。一度動き出したグループの影響力はとても強い。小グループの体験の中ですごく成長する子どももいるし、グループの展開についていけなくなる子どももいる。グループの展開は、様々な状態の子どもがいるので、どのような展開になるのか、読み切れないことが多い。そこで、グループを利用しつつ、一対一の面接相談の時間を組み合わせることも行われている。一対一のカウンセリングは、基本的に子ども自身のペースをカウンセラーが尊重することができる。

(3) 心の消化機能

適応指導教室では、その子の状態に合わせて、柔軟に対応している。そのため、「適応指導教室では、子どもをただ遊ばせているだけではないのか？」という批判を浴びることがある。「適応指導教室は、ぬるま湯のようなものである」という批判を受けることもある。利用者の親も、同じような疑問に基づいて不安を感じていることがある。「楽な場所だから、一度、その教室に入れたら、二度と出てこれなくなるのではないだろうか？」と心配になる。「教室に馴染んでしまうと、子どもが自発的にそこからでようとするのではないだろうか？」と恐れているのである。

筆者は、これらの批判や恐れに対して、「適応指導教室は、お粥のようなものです」と説明している。適応指導教室に集まってくる子どもたちは、病み上がりのような状態である。本人の消化機能は弱っているので、それに応じた薄味な対人関係でちょうどいいのである。本人が回復してくると、いつまでもお粥を食べていることはない。薄味過ぎておいしく感じなくなってくる。いつまでも、ぬるま湯から出ないということはある。本人が、適応指導教室の中

にすることが物足りなくなってきたり、窮屈になってくるのである。

子どもの適応指導教室内での変化は、ゆったりした回復のペースである。このゆったりしたペースのアクセントになるのが、《行事》である。一番、大きな行事は、キャンプであるだろう。キャンプに参加すると、そこをきっかけとして、グッと回復のピッチが速くなる感じがする。一方、そこでの体験を消化できない場合は、キャンプを契機として、調子を崩してしまうだろう。教室にもしばらく顔を出せなくなってしまうこともある。キャンプ参加が問題になる場合は、二通りある（修学旅行などの行事もこれに準じる）。①一つ目は、本人がその気がないにもかかわらず、親や担任教師がなんとか参加させようとしている、あるいは、参加して欲しいと望んでいる場合である。②二つ目は、周囲が心配しているにもかかわらず、本人が参加を表明している場合である。

①の場合、親や教師は、「キャンプの参加が再登校のきっかけになるのではないだろうか?」、あるいは、「参加できたことが、本人の自信になるのではないだろうか?」と願っていることが多い。このような状況で相談を受けた場合、筆者は「キャンプは、カロリーの高い食事のようなものだ」と説明している。キャンプに参加する場合は、消化機能の弱っている状態でトンカツを食べようとしているのと同じである。そこでの体験を消化できれば、身になる。しかし、消化できなければ、下痢をしてしまうだろう。このような形で、親や教師の願いに釘を刺した上で、「はたして本人の現状が目の前の体験を消化できるだろうか?」という点について話し合う。ここで、結果的にキャンプに参加することになるのか、ならないのか、そこは重要でない。このような話し合いを通して、親や教師が本人の心理的世界（特に、本人の担っている苦しみ）についての理解を促進させることにポイントがある。

一方、②の状況で、親や教師から相談を受け

た場合、彼らは心配しつつも期待しているという複雑な心境にある。筆者の場合、本人の参加の意思を尊重しつつも、「現実に参加できるかは、当日の朝にならなければ分からないから、ドタキャンされてもがっかりしないように」と見え隠れする彼らの期待感に釘を刺しておく。その上で、(1) 当日、もし参加した場合のために、グループ作りなどの下ごしらえはできているだろうか? (行事当日から逆算して、これから準備できるだろうか?)、また、(2) 途中でリタイアする可能性があるから、当日の急な呼び出しの連絡に対応できだろうか?、などの話題で親と教師と話し合う。ここでも、ポイントは、これらの具体的問題の材料を切り口にして、本人の現状をより深く理解しようとするのが狙いである。

VI ポスト・サナギ

本論文において、筆者は思春期型不登校における《サナギ・イメージ》を特に大切なものとして強調した。サナギの殻を無理に破こうとすれば、より深刻な症状を引き起こすことになる。そこで、サナギが自分の力で孵るまで待ち、仮に不登校が解決したとする。その時、このような不登校状態を体験したことは、何らかの欠陥を後に残すことがあるのだろうか? この問いを心に留めつつポスト・サナギについて考えて見たい。

不登校は、いずれ何らかの形をとって終える。例えば、①成長した自分として蘇るかもしれない。逆に、②より病的な状況へと発展していくかもしれない。あるいは、③そのまま、《社会的ひきこもり》へと移行するかもしれない。

①の場合は、サナギが上手くチョウへと変身した場合である。

②の場合は、不登校の中に隠れていた病的状態が花開いて、本格的な療養生活に入る場合である。成人期の本格的なノイローゼや精神病的《前触れ》として不登校を呈する場合がある。

ノイローゼや精神病の典型的な症状をきれいに
出すためには、ある程度の心の力の成熟が必要
条件となる。そのため、ノイローゼや精神病は、
青年期以降に発症できるようになる。発病の条
件が出そろったまでの間、不登校は《隠れ蓑》と
して利用されるのである。

③の場合は、サナギ状態を高校時代以降にま
で持ち越した場合である。上述したように、不
登校の子どもは、あくまで学校に在籍している
からこそ、《不登校》なのである。学校を辞め
てしまえば、ただの人になってしまう。子ども
たちは、学校に行かなくても歳をとる。そして、
義務教育年齢を過ぎて家に居るぶんには、不登
校ではなくなる。卒業後、女子の肩書きは、《家
事手伝い》ということになる。しかし、男子は
女子と同じにはならない。男子が定職に就か
ず、家に居ると、《社会的引きこもり》という
新たな診断ラベルが貼られる。「不登校は、病
気なのか？病気でないのか？」という議論も、結
局は、社会的要請との関数関係によって決まる。
社会文化の変遷によって、いくらでも病気の定
義が変わる。最近ではフリーター／フリーラン
スが増えて、定職に付かないでいるということは、
それほどおかしく思われなくなった。しかし、
まったく仕事をしないで家に入る男性を現在の
日本社会は病気とみなしている。

不登校の子どものほとんどは、学校生活の中
へと戻って行く。中学生の不登校は、長期化し
やすい傾向がある。そのため、不登校状態のま
ま、卒業を迎えることも多い。筆者は、適応指
導教室をコンスタントに利用できていたり、カ
ウンセリングに継続的に通っていた子どもは、高
校入学を機会に復帰していくことが多い印象を
受けている。いずれ戻るにせよ、どのような状
況でサナギ状態を経過したかは、その後の状況
に多くの影響を与えるだろう。例えば、①白眼
視されて、針の筵のような家庭で、その時期を
通過したのか？逆に、②狭いながらも深い心の
居場所があり、サナギが温かく守られたのか？
あるいは、③自分でもよく分からないような深

層心理についての理解者との出会いがあったの
か？この3つの場合は、それぞれその後の状態
が違おうと思う。できるだけ良い環境でサ
ナギ状況を守る必要がある。不登校の子どもを
抱えた親は、必ず不安になる。担任も同じだろ
う。彼らを支えるあたたかな人間関係と専門的
見通しの必要性を重ねて強調したい。

文献

- 河合隼雄 (1970)：カウンセリングの実際問題、誠
信書房。
河合隼雄 (1992)：子どもと学校、岩波新書。
河合隼雄 (2000)：おはなしの知恵、朝日新聞社。
森田光子 (1998)：保健室空間の意味、こころの健
康、13(2)：7-11。
中井久夫・山口直彦 (2001)：看護のための精神医
学、医学書院。
篠原道夫 (2001)：疲れを訴える不登校男子との心
理療法過程の検討、平塚市子ども教育相談セン
ター教育相談研究紀要第5巻：43-56。
山中康裕 (1978)：少年期の心、中公新書
山中康裕 (1996)：臨床ユング心理学入門、PHP 新
書